OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	九鬼周造の人間学
Author(s)	織田, 和明
Citation	大阪大学, 2021, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/81981
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

様式３

論　文　内　容　の　要　旨

氏　名　（　織田　和明　）	
論文題名	九鬼周造の人間学

論文内容の要旨

本論文では九鬼周造の哲学の特徴を近代の人間学とみなして、その軌跡を主に破綻と再建という視点から研究した。本論文では近代の特徴として主に孤独と戦争の二点を挙げた。近代日本の発展と歩調を合わせて成長してきた九鬼であったが、人生の躓きによって近代人の抱える孤独に直面し、そこから脱出する方法を探求するようになる。偶然存在する孤独な実存が想像力によって共同体に開かれて他者と出会い、人間となる。しかし人間となった実存はしばしば自身の偶然性を忘れ、自分たちこそが最も優れた人間であると思い上がる。そして他者を見下して自分の思想に従わせようとするようになる。これが彼の哲学の歩みであった。それと軌を一にして肥大した大日本帝国はアジアの盟主という野望を抱いてアジア太平洋戦争に突入し、彼の死からほどなくして崩壊する。近代日本の申し子として昭和前期に活躍した九鬼の哲学の研究を通じて近代日本哲学の到達点と課題を明らかにした。

「はじめに：近代に人間であること」では九鬼を近代の申し子に位置付けるとともに中井正一の近代論を参照して「近代」について論じた。九鬼がまさに近代日本の暴力と資本が生み出した最高の哲学者であることと生が流動化して自我が失われていく時代に抗い、人間として理念を掲げた哲学者であることを示した。

「序論：九鬼周造小伝」では周造の父である隆一と母の波津子のことから始めて、周造の生涯を簡単にたどり直した。本論文では九鬼自身の交友関係や妻の縫子の実家である中橋家との関係、そして縫子との離婚騒動も周造の人生と哲学に大きく影響していることを示した。九鬼の経済的、家庭的安定が離婚騒動によって揺らいだ時期に彼は日本精神論を執筆することを止めて偶然性論に集中的に取り組み、孤独な実存が共同体へと復帰するための理論を研究していたことは特に重要である。

「第一章：トリロギーとデュアリズム―九鬼周造の人間学の破綻」では九鬼の哲学の第一の特徴として「トリロギーとデュアリズム」を指摘した。「身」「心」「神」のトリロギーを本論文では「「三つのしん」と呼んだ。これが登場する日本精神論は彼の哲学者としての活動の初期と後期にのみ発表される。この空白期間に彼は『偶然性の問題』の出版に向けて偶然性論の研究に取り組んでいた。日本精神論の中断の原因の一つには『「いき」の構造』に見られるような「三つのしん」に象徴される本質主義的思考と具体的な個別を論じようとする思考の間の矛盾が考えられた。そして彼はかなく壊れやすい偶然的な存在である具体的な個を偶然性論で研究するようになった。

「第二章：「現実」を求めて―『偶然性の問題』の論理学」では、まず『偶然性の問題』に至るまでの九鬼の偶然性研究の歩みを確認した。次に『偶然性の問題』の全体像を概観した。その上で彼の『偶然性の問題』における形而上学の問題が論じられている「離接的偶然」の章に焦点を当てることとして、第二章ではその基礎となる彼の様相の三つの体系の読解を試みた。この様相論を総合する理論である「生産原理」が彼の行為論のモデルとなっていた。

「第三章：世界を創る―『偶然性の問題』の行為論」では前章で読み解いた九鬼の行為論の理論モデルを踏まえて「離接的偶然」の章の議論を彼の行為論として解釈し、彼の哲学の実存の哲学としての側面を明らかにした。実存は偶然の現在にある経験を受け止めることによって意味を付与して運命を構築する。それによって関主観的共同性と歴史性を拓いて可能な連続性を持った行為を実践して主体を形成し、人間となっていく。この脆く壊れやすい主体を持ちこたえさせ、世界の中で行為していくことが『偶然性の問題』における彼の偶然性の哲学の主題であった。

「第四章：永遠回帰する宇宙―詩の美と実存」では九鬼の哲学のもう一つの柱である永遠回帰を論じた。彼の永遠回帰論は「時間の観念と東洋における時間の反復」と「形而上学的時間」である。これまでの先行研究は基本的に両者の議論の内容に大差はないとして、前者の読解を中心にして彼の永遠回帰論を論じてきた。しかし実際には、前者はまだまだ修正すべき点が多い発展途上の論考で、後者こそが彼の哲学の成熟と転回を示していた。前者はフランスの知識人たちに東洋思想を紹介するという意図があったためか、形而下と形而上の一切を生産しているのは一人の人間の観念だというあまりに観念的で独我論的な議論となっていた。後者ではオスカー・ベッカーの議論を参照することで、観念的で独我論的な議論から脱却し、永遠回帰するマクロコスモスという運命に我々は担われているという想像を人間がしているという立場に切り替えた。この想像的で神秘的な永遠回帰の水準と、偶然存在するこの現実を橋

渡しするのが芸術家であり、押韻詩を作成する詩人であった。永遠回帰とは行為の可能性を担保して彼の偶然性の哲学の生産原理を根底で支える基盤としての想像力である。それゆえに永遠回帰するマクロコスモスと偶然存在する実存を橋渡ししてそれを音の邂逅に象徴させる詩の美に九鬼は特別な意味を込めた。

「第五章：トリロギーとナショナリズム―九鬼周造の人間学の再建」では『偶然性の問題』以降の共同体と歴史を取り戻して再び日本精神論を発表するようになった時期の九鬼の哲学について検討した。主に「人間学とは何か」の読解を通じて彼の哲学の仕組みの変化とナショナリズム的展開の危険性を明らかにした。彼は「三つのしん」を理想的に兼ね備えた現勢的無限である日本神話を模範とすることで、種である日本民族の理念を存在論的に強固にした。そしてその理念である「三つのしん」を理解して実践することができる日本人男性を最も優れた人間とみなして他の民族や女性といった他者を差別するような主張をしたり、独断によって形成された間違った本質によって個々の実存を規定したりするようになった。この思想はアジア・太平洋戦争において日本が他国への侵略を肯定するために用いた理論と方向性を共有していた。

「結論：現代の人間科学へ」では今までの議論を総括して九鬼の哲学の全体像を提示するとともに、残された課題とその解決の方向性を示した。彼は自分の哲学を体系化できていない時代を経て、壊れやすい偶然性論の体系と強固だが危険な日本精神＝人間学の体系の二つを生み出していた。彼の陥ったように独断的で間違った本質主義へ転落しないために人間学を越えて科学的で学際的な人間科学へと進むことが考えられる。哲学だけに閉じこもることなく広く様々な分野と交流と接し、量的研究が明らかにする集団のあり方を学ぶすることで独断に陥らないようにしなければならない。この問題を考える際に鍵になるのは近代の個人主義を批判して集団の美へと理論と実践の両面からアプローチした中井正一の思想である。個々の実存に寄り添う九鬼の偶然性の哲学と集団で協力しながら思考して実践する中井の集団の美学を接続して新しい社会論を研究することが必要となってくるだろう。九鬼の哲学はナショナリズムへの傾倒に終わってしまったが、もし彼が戦後まで生きていれば、新しい展開もあっただろう。現実化しなかった彼の人間学の可能性を想像し、現実化していくことができるのは人間である。

様式７

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏　名　（　織田　和明　）		
	（職）	氏　名
論文審査担当者	主査　教授 副査　教授 副査　教授	檜垣　立哉 村上　靖彦 藤川　信夫

論文審査の結果の要旨

織田和明氏の博士論文は「九鬼周造の人間学」と題され、大正期から昭和の初めにかけて活躍した九鬼周造の思考を、時代に即応した流れのなかで押さえるとともに、『「いき」の構造』『偶然性の問題』「人間学とは何か」を巡り考察を展開し、現代にまで及ぶ日本思想の代表的思想家である九鬼の姿を刷新して提示するものである。織田氏は、九鬼の思考に色濃い、二項対立としてのデュアリテと、『「いき」の構造』などで際だった三項関係としてのトリロギーの解読軸を提示するとともに、『「いき」の構造』のなかで示される論理性が『偶然性の問題』においては実在の探究に移るにしたがって、近代に特有な孤独な個が析出されることに着目した。そしてその後の人間学の探究において、そうした九鬼の論調がある種の民族的な「共同性」に移行するとともに、そのこと自身は当時の第二次世界大戦とも連関しおおきな政治的問題を含むことを指摘し、そしてそれを越えた九鬼の思考の展開の必要性を論じている。

本論文は、はじめにと序論を含む5つの章と結論部により構成されている。

はじめにと序論においては、九鬼の置かれた近代日本という背景と、九鬼自身の家庭的背景や京都学派とのかかわりを、とりわけ中井正一という美学者で九鬼の京都大学の弟子筋にあたる人物の観点からとらえ、また九鬼自身については従来よく論じられがちな岡倉天心との精神的な父子関係というよりも、離縁する妻とその実家との関係を中心に、九鬼自身の人生が描きだされている。これは従来の九鬼論には見られないアプローチであるといえる。第一章においては、九鬼の思想が、先に述べたように三項関係であるトリロギーと二項対立としてのデュアリズムという二つの軸を基本とするという読解方針が示され、総じて九鬼の思考がある種の陥穽にはまっていくことがのべられ本論全体の構図が示される。

第二章以下においては個別の作品分析がなされる。第二章では九鬼の主著である『偶然性の問題』にいたるまでの九鬼の歩みを確認し、その全体像を概観するとともに、そこでの九鬼の定言的偶然、仮説的偶然、離接的偶然と進んでいく論理的な記述の仕方そのものがある種の問題を含むことが示される。そして第三章では同じく『偶然性の問題』行為論が離接的偶然において原始偶然が論じられ、論理学的な構造性に対して、ある種の実在性のダイナミズムがとりだされることが提示される。ここにおいて、九鬼がいわば「孤独」な自我が「無」と向きあい、一瞬の偶然性のなかで実在がとられられることに、偶然論の本領がみいだされるとされる。第四章においては、こうした九鬼の議論が、『偶然性の問題』以前にパリ留学時の「ポンティニー講演」のフランス語で書かれた「時間論」を軸にある種の永劫回帰の議論を織りこんで描かれていることが提示される。そして第五章においては、晩年の「人間学とは何か」を軸とした読解を行うとともに、そこで九鬼は日本神話をモデルとした民族的理念について相当素朴な言説を時代のなかで提示していることが批判される。このことは、九鬼の議論がある種の近代のなかに立つ「孤独な自己」であるとともに、それがゆえに九鬼がそうした孤独さから抜け出す理路を探らざるを得なかった事情があまりに性急に日本神話と関連させられることが、「現勢的無限」を巡る九鬼自身の思考を逸脱させたものであるとのべられる。

結論部においては、論考の全体がまとめられるとともに、こうした九鬼の逸脱がある時代的制約のなかにあったことも踏まえつつ、現代の人間学を形成するなかで、様々に読解される九鬼において、そうした時代から解き放った読解を展開する可能性が示唆されることになる。

九鬼周造に関しては、西田幾多郎を中心とする京都学派のなかで傍流しされつつも、『「いき」の構造』におけ

る日本文化論のみが強く語られる傾向が続いてきたが、90年代以降偶然論を中心とする問題系が、現代的な哲学的課題とも関連しながら強調されてきたという経緯がある。本論文は、とりわけ近代のなかで自己のあり方を模索する九鬼の姿を、戦後期に活躍した中井正一との対比においてとらえるとともに、そこでの九鬼自身の思考の失敗の時代的必然性と、しかしなおとらえなおされるべき九鬼の議論の再構築の方途を開いた試みたものとして積極的に評価できる。

論文審査の結果、本論文は博士(人間科学)の学位を授与するのにふさわしいものと判定した。